

名前 ( )

▼「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と言えり。されば天より人を生ずるには、万人は万人みな同じ位にして、生まれながら貴賤上下の差別なく、万物の靈たる身と心との働きをもって天地の間にあるよるずの物を資り、もって衣食住の用を達し、自由自在、互いに人の妨げをなさずしておのおの安楽にこの世を渡らしめ給うの趣意なり。されども今、広くこの人間世界を見渡すに、賢き人あり、愚かなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、その有様雲と泥との相違あるに似たるはなんぞや。その次第はなはだ明らかなり。『実語教』に、「人学ばざれば智なし、智なき者は愚人なり」とあり。されば賢人と愚人との別は学ぶと学ばざるとによりてできるものなり。▲

\* 一部表記を改めた

																			▼
																			└
▲																			

小説視写「走れメロス①」

太宰 治

名前（

）

▼ふと耳に、水の流れる音が聞えた。すぐ足もとで、水が流れているらしい。よろよろ起き上って、見ると、岩の裂目から清水が湧き出ているのである。その泉に吸い込まれるようにメロスは身をかがめた。水を両手で掬って、一口飲んだ。ほうと長い溜息が出て、夢から覚めたよ。うな気をした。步ける。行こう。肉体の疲労回復と共に、わずかながら希望が生れた。義務遂行の希望である。わが身を殺して、名誉を守る希望である。斜陽は赤い光を、樹々の葉に投げ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。日没までには、まだ間がある。私を、待っている人があ。るのだ。少しも疑わず、期待してくれて。いる人があるのだ。私は、信じられて。いる。私は、信頼に報いなければならぬ。いまはただその一事だ。走れ、メロス。

\*字数の関係で、削除や表記を改めたところがある。

																								▼









古文視写「平家物語」

名前（ ）

祇園精舎の鐘の聲、

諸行無常の響きあり。

沙羅双樹の花の色、

盛者必衰の理をあらはす。

おごれる人も久しからず、

ただ春の夜の夢のごとし。

たけき者もつひには滅びぬ、

ひとへに風の前の塵に同じ。

		▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	
							△			
									△	
								△		
				△	△	△				
		△	△							





























▽顔は誰でもごまかせない。顔ほど正直な看板はない。顔をまる出しにして往來を歩いてゐる事であるから、人は一切のごまかしを観念してしまふよりほかない。いくら化けたつもりでも化ければ化けるほど、うまく化けたという事が見えるだけである。△

▽顔ほど微妙にその人の内面を語るものはない。性情から、人格から、生活から、精神の高低から、英知の明暗から、何か何まで顔に書かれる。△

			▽							▽
					△					
△										

▼ある曇った冬の日暮である。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電燈のついた客車の中には、珍しく私の外に一人も乗客はいなかった。外を覗くと、うす暗いプラトフォームにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶って、唯、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しもうに、吠え立てていた。これらはその時の私の心もちと、不思議なくらい似つかわしい景色だった。私の頭の中には云いようのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落していた。私は外套のポケットへじっと両手をつっこんだまま、そこにはいつか夕刊を出して見ようという元気さえ起らなかった。▲

																				▼

名前

「曾根崎心中」

近松門左衛門

この世の名残、夜も名残

死に行く身をたとふれば

あだしが原の道の霜

一足づつに消えて行く

夢の夢こそあはれなれ

あれ数ふれば暁の

七つの時が六つ鳴りて

残る一つが今生の

鐘の響きの聞き納め

寂滅為楽と響くなり

鐘ばかりかは草も木も

空も名残と見上ぐれば

雲心なき水の音

北斗は冴えて影映る

星の妹背の天の河

梅田の橋を鶺鴒の

橋と契りていつまでも

我とそなたは女夫星

必ず添ふとすがり寄り

二人が中に降る涙

川の水嵩もまさるべし

A grid of 18 rows and 18 columns for writing answers. Some cells contain a right-pointing triangle symbol.



「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」

李白

故人西のかた黄鶴楼を辞し  
 煙花三月揚州に下る  
 孤帆の遠影碧空に尽き  
 惟だ見る長江の天際に流るるを

「春曉」

孟浩然

春眠曉を覚えず  
 処処啼鳥を聞く  
 夜来風雨の声  
 花落つること知る多少

			▼	▼	▼	▼		【				▼	▼	▼	▼		【
								春									黄
								曉									鶴
								】									楼
																	に
																	て
																	孟
																	浩
																	然
																	の
																	広
																	陵
																	に
																	之
																	く
																	を
																	送
																	る
																	】























名前 ( )

▼十七條憲法は治世のための律法でもなく、単なる道徳訓でもない。それらの意味をふくめてはいるが、むしろ太子自身そつちやくの率直な祈りの言葉なのである。私はそのかい解する。あるいは同族殺戮の日において民心みんしんに宿った悲痛ひつうの思いと願いを、一身しんにうけてあらわされたのだと申してもいいであろう。かくあれかすと衷心ちゆうしんより念ねんじ給たまうた言葉であって、その一語一語に、太子の苦悩くなんと体験たいけんは切せつに宿っているはいさつと拝察はいさつされる。▲

\*一部表記を改めた。

(亀井勝一郎の文章による)

													▼

視写「初恋のやり直し」  
 山之口 獯

名前 ( )

▼ 小学校の六年生になってからのこと、ぼくは机つくえの前に座すわっていても、それは父や兄などの手前てまえで、勉強しているふりをしてにるにすぎなかった。ある少女のことに気をとられていたからなのである。少女はしばしば、ぼくの家いえの近所きんじよに遊びに来た。そこには沼ぬまがあって、その沼ぬまの水みづのなかに、少女は着物のスソをまくしあげてはいった。水すましやげんごろうが、彼女かのじよのスネのまわりを泳ぎまわり、彼女かのじよは腰こしをこごめて浮草うきくさなどを、手にすくったりして遊んだ。▼ その少女が、いつも、ぼくの頭のなかにこびりついていて、机つくえを前まへにしては勉強しているふりをしてにるうちに、中学ちゅうがくの入学試験しけんには落第らくだいしてしまった。▲

																						▼

